



教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

東浦町SP通信

～東浦町では、学生ボランティアを“職員の仲間”という思いを込めて、
「SP」または「スクールパートナー」と呼んでいます。～

第17号

2025年12月20日

編集 緒方 なな
東浦町教育委員会
SPコーディネーター

冬休みわくわく算数教室 ～事前説明会～

12月6日、土曜日にも関わらず10名以上のSPさんが来てくれました。ありがとうございました。みなさんの志の高さ、熱心さに東浦町のSP活動は支えられています。それと同時に、ここ数年、このわくわく算数教室の説明会では片葩小学校の貝沼校長先生がさまざまなお話をしてくださっており、それがSPさんにとっては1つの大きな魅力となっていると思います。今回の説明会でも大変勉強になるお話を聞かせていただきました。ぜひシェアしたいと思います。わくわく算数教室に参加予定のSPさんはぜひご一読ください！！



- 教員って魅力がいっぱい。これは実際になってみないと分からない。社会的風潮では“ブラック”と言われるが、内心「何がブラックなんだ？」と思っている教員も多い。ぜひSPも体験して、1回は教員になってみてほしい。そして1年は頑張っていてほしい。（途中で辞めてしまうと、特に小学校は人が足りないで大変になってしまう。）実際に1年やってみて、教員という職業がブラックかどうか、ぜひ自身の目で確かめてみてほしい。
- 校長室前に毎年掲示をしている「今年の漢字一文字」、ぜひみなさんにもこのメッセージカードに書いてほしい。呼び水となるよう、読みやすい字でお手本になるように書いてもらいたい。小学生に分からない難しい漢字でもOK。ただ1つ、注意してもらいたいことがある。例えば「死」や「殺」という文字は経験が少ない小学生なので、イメージがしづらかったり、偏ったイメージをもちやすかったりする。こういった言葉は控えてもらいたい。「苦」や「嫌い」といった文字は、子どもたちもいろいろ経験があると思うので良いと思う。できるだけ前向きな一文字が良い。
- （この後、書いた一文字を発表してくれたSPさんがいました。）
 - ★ Mさん「戦うの“戦”にしました。これから教員採用試験やそれに伴う勉強で、人生で一番勝負の時だと思います。なので、この“戦”という文字にしました。」
 - ★ Tさん「努力の“努”にしました。これから教員採用試験やインターンが待っているの、そこに向かって努力していきたいと思ったので選びました。」
(指導主事の先生も発表してくださいました。)
 - ★ 自分の好きな言葉である“夢”にしました。みなさんはたくさん夢があると思いますが、自分も夢を持って、目標を持っていきたいと思っています。
- 実は去年、子どもの中で2人「死」という文字を書いた児童がいた。自由に校長室前に貼れるようになっていたので貼ったと思うが、早い段階で見つけたので取ることにした。その後「しまったな」と思った。それは理由を書いてもらう時間があつたらよかったのに、それを聞かずに取ってしまったと思ったから。そこで、2枚目を貼った子がいたので、そこに取ってしまった1枚目の「死」を書いた子の分も再度貼りなおし、終業式の日「取ってしまつてごめんね」と伝えて理由を説明してもらった。例えば、おじいちゃんおばあちゃんなど家族が亡くなつたら「死」と書く子は当然いると思う。「死」という字のマイナス面ではなく、「死」について考えた子は書くと思う。（一文字）書かせることも大切だと思うが、それ以上に

理由を聞いてあげることの方がきっと子どもたちにとっては満足感は高くなるのではないかと思う。

- 子どもたちは自由に書いていくが、去年、1年生の中の1人が「学」という字を書いた。もう一人が「校」と書いた。2枚並べて「学校」にしている。「いいな」と思った。一文字では伝えられなくても、友達がいれば伝えたいことが伝えられる、それもいいなと思った。
- 今日のメインの話はこちら（算数の教科書を提示）。みなさんの手元にも、同じ単元の同じ内容が比べやすいページをプリントしたものを2枚配ったので見てほしい。隣に並べて見比べてほしい。全国シェアNO. 1とNO. 2の出版社の教科書、同じひっ算の単元で何が違うだろう？
- どちらが良い悪いではない。どちらの教科書も文科省の検定を受けて出版されているので、どちらも正しい。知多地区は全部同じ、全国シェア2位の出版社。1位の方は、東京書籍。2位の方は、愛知県が使っている啓林館。では、どちらが啓林館か、考えてみて。それから、このページを子どもたちに見せるならどちらを見せたいかも考えてみて。
- 文科省が、算数は「数・式・図・表・言葉」だとずっと言っている。出版社もかなりそれを意識して、教科書改訂の度により分かりやすいものにしていっていると感じる。愛知県は、もともと「生活教育」いわゆる問題解決学習（＝日常の中から問題を持ってきて、それを教科におとして課題にし、解決していく）を一生懸命取り組んできたし、今も力を入れていると個人的に考えている。教科書作りをする時に地元の先生や地元の大学の先生も大いにに関わりながら作っているのだから、啓林館は比較的生活教育が算数の中で基本になっている。より生活感が感じやすいと感じる。東京書籍はシンプルにズバッと分かりやすくまとめている感じがする。
- 裏面の分数も見てみよう。分数はまず、「 $1/2$ 」や「 $1/3$ 」という日常の言葉として出てくる。そして今回プリントにある単元で明確に「数」として出てくる。これも啓林館は、基準となる1mから出る分（^{はした}端）をどう数字で表したらよいか？という、その根本からスタートしている。そういう所が愛知県で愛されている部分かもしれない。
- 1つの教科書会社にかかれてることを準拠してやっていくのも良いが、これから教育実習はもちろん教員になってからも、違う出版社の教科書を見比べてみることはとても参考になる。どこが大事なのか分かりやすくなる。
- 分数は小学生にとっては“ヤマ”になる単元。これは私の感じ方だが、啓林館の方はこの単元で、分数は^{はした}端として、整数では表せない数字の表し方として「数」として扱っている。東京書籍の方は、すでに「割合」の要素が入っている。分数は割合として使っていくことが多いが、“数値”と“割合”の判断をつけさせるのはとても難しい。繰り返し問題を解いていく必要があると思う。わく算でも割合に関わる問題が多いと思うが、これ（分数）は数値の方なのか？割合の方なのか？みなさんも少し整理しながら、言葉を丁寧に渡していくと子どもなりに理解していくのではないかと思う。
- つい先日、教頭先生が「算数の壁はどこにあるんですか？」と聞いてきた。私は、「しいてあげるなら3年生かな。」と答えた。どの教科もだいたい同じだと思うが、私は小学生の間はそんなに思考力の壁はないと思う。教科書に載っていることをやっつけていけば、あとはその組み合わせ。難しい問題はやり方を覚えて過ぎていってもいいことは多いと思う。あまり思考力、思考力とこだわるよりは、まず、「 $1/3$ は数値としてはこうだね」でいいかなと思う。もう一つ、このページの図、円で表してない。これすごく大事！必ず、1mという“単位量”が使えるもので入っていく。これが円だと割合からスタートすることになる。子どもがどっちを勘違いしているかを感じながら、わく算を過ごしてほしい。
- 授業でやってないことをチャレンジしてもらってももちろんOK。方法が分かれば、未習のことでできていく。これは「後付け」というが、2桁のひっ算までしかやっていない子でも、10を束ねて100、100を束ねて1000、という概念が分かれば3桁や4桁のひっ算もできるようになる。